

日本画家・長谷川喜久さんに聞く

「風景との出会いに感応」

現状にとどまらず常に新しい表現を追い求める日本画家・長谷川喜久さん(59)＝岐阜市＝。昨年11月には郡上市高鷺町の夫婦滝近くの岩場を描いた「緑顔に白く」で、日展最高賞の文部科学大臣賞を受賞した。受賞について「仕切り直しを意味しており、新たなスタートを切ったということ」と語る長谷川さんに、現在の境地や今後の創作について聞いた。(大成朋広)

日展大臣賞「新たなスタート」

改めて文部科学大臣賞おめでたいと思います。

ありがとうございます。ただし受賞するということは責任を伴うということ。審査されない立場である会員は、仮に悪い作品を出しても会場に飾られることになる。そうならないよう、一つの作品にかける熱量は初め

で出展した時と同じか、それ以上じゃないといけない。

「緑顔に白く」は奥内がモチーフ。高鷺町の夫婦滝に続く山道から見えた岩とつるを描いた。都知事賞を頂いた時も奥内がモチーフだったので、縁起が良かった。夫婦滝を目指して行ったが、あそこでそこに、呼ばれた感

とろ。天気や時間帯の加減で滝の手の岩が光って見えた。大きい岩が「ボン」とあたって組み合い、その隙間には生命を感じさせるような暗い空間が奥へ続いている。さらにつるが横切っていて造形として魅力があった。描かなければいけない理由があつてそこに、呼ばれた感

光、空気、音まで含んだような質感を表現したかった。僕がその瞬間を受けた印象の白を出せたかな。

近年は風景画に力を入れていて、20代から30代は、頭の中で考えたものを具現化するような人物画を描くことが多かった。それに対して風景画は「出会いと運」。相手任せで、コントロールできず、自分ではどうにもならない要素があることに面白さを感じる。

今後の活動は、新しいシリーズで、モノクロの「formsフォームズ」と、色を付けた「colorsカラース」に取り組んでいる。雪景色や大樹を描いたフォームズは、黒の大地に雪や空間の白をのせていくって結果的に残

「改めまして文部科学大臣賞おめでたいと思います。ありがとうございます。ただし受賞するということは責任を伴うということ。審査されない立場である会員は、仮に悪い作品を出しても会場に飾られることになる。そうならないよう、一つの作品にかける熱量は初め

で出展した時と同じか、それ以上じゃないといけない。

「緑顔に白く」は奥内がモチーフ。高鷺町の夫婦滝に続く山道から見えた岩とつるを描いた。都知事賞を頂いた時も奥内がモチーフだったので、縁起が良かった。夫婦滝を目指して行ったが、あそこでそこに、呼ばれた感

とろ。天気や時間帯の加減で滝の手の岩が光って見えた。大きい岩が「ボン」とあたって組み合い、その隙間には生命を感じさせるような暗い空間が奥へ続いている。さらにつるが横切っていて造形として魅力があった。描かなければいけない理由があつてそこに、呼ばれた感

光、空気、音まで含んだような質感を表現したかった。僕がその瞬間を受けた印象の白を出せたかな。

近年は風景画に力を入れていて、20代から30代は、頭の中で考えたものを具現化するような人物画を描くことが多かった。それに対して風景画は「出会いと運」。相手任せで、コントロールできず、自分ではどうにもならない要素があることに面白さを感じる。

今後の活動は、新しいシリーズで、モノクロの「formsフォームズ」と、色を付けた「colorsカラース」に取り組んでいる。雪景色や大樹を描いたフォームズは、黒の大地に雪や空間の白をのせていくって結果的に残



日展文部科学大臣賞の「緑顔に白く」



はせがわ・よしひさ 1964年岐阜市生まれ。金沢市立美術工芸大学大学院修了。99年と2001年に日展特選、05年日展会員賞。日春賞、川端龍子賞大賞展大賞など。22年日展文部科学大臣賞。日展特別会員、新日春展理事。名古屋芸術大教授、芸術学部芸術学科美術領域日本画コース所属。若い頃、ロックやブルースのバンドを組んでいた。パートはギター。大学のアトリエにはレコードプレーヤーを置くほどの音楽好き。

▲1年で18回ほどの展示会が控える長谷川喜久さん。研究室兼アトリエには新シリーズ「forms」と「colors」などの作品が並び、愛知県北名古屋市、名古屋芸術大西キャンパス

「肉熱期に入っていく。自身の思い描く姿や、後進への思いは。煮てくれる岐阜の林真さん、福本百恵さんら作家や学生たちは、芸術に素直で、本当に描きたい気持ちにあふれている人ばかり。そういう人たちが良い活動をしているのはとてもうれしい。

自分が尊敬する画家は草間彌生、竹内栖鳳、高山樗牛です」と変わっていない。その理由は「これで完成」と創作を止めてしまつたのではなく、常に新しい展開を見つけてきたところが大い。自分の作品をより多くの人に見てもらいたいという気持ちが強くなっている。先人たちが受け継いできた精神性や素材を踏まえ、日本画である意味を考えながら、現代絵画として成り立つような現代日本画を追求していきたい。